

座長のまとめ

演題発表座長を終えて

東 雅 代
(金沢医科大学附属看護専門学校)

第21回石川看護研究会学術集会において、演題発表の座長の機会をいただきました。担当させていただいた1群は、臨床での看護実践に関わるもの1題、病床環境改善に関するもの1題、看護教育に関するもの1題の3題でした。

第1席、金沢大学医学部附属病院の堀美緒さんの発表は、末梢循環障害の予防の必要性に立脚し、近年ケアとしても注目されつつあるアロマセラピーの効果を検証したものでした。アロマオイルとベースオイルでそれぞれマッサージし、サーモグラムと皮膚表面温度をマッサージ後2時間まで測定し、温度の上昇と比較、効果を評価していました。末梢循環障害の予防を看護の力で行なえる可能性が示唆され、また実際に患者に適用するために、今回得られた結果から新たな取り組みもなされているとのことで、発展的な研究、看護実践へつながっていくのではないかと感じました。

第2席、山中温泉医療センターの菅上綾香さんの発表は、病棟の特性からオムツ交換時に増強する臭気に着目した研究でした。オムツ処理の方法を変更し、その前後の臭気測定値を比較して、オムツ処理方法を変更したことが臭気改善につながったとの結果でした。会場からの質問もいくつかあり、同様の問題意識をもって日々看護している方々への参考になったことと思います。今回、3点の改善をされており、どの改善が最も臭気改善に効果があったかということまでは検討なされませんでした。改善したオムツ処理方法が定着し、

研究結果が活かされ、患者への快適な療養環境提供につながっていただけることを期待します。

第3席、浅ノ川学園金沢看護専門学校の石井和美さんの発表は、陰部洗浄の技術を実技試験に取り入れ、確実な技術習得につながったかを学生・教員へのアンケートにより検討したものでした。今回の調査で、学生の患者体験が羞恥心への配慮につながり、技術自体は習得できたとの結果でしたが、一方で羞恥心への配慮の評価が困難であったことやモデルでの実技の評価には限界があったことも報告されました。研究対象となり実技試験を受けた学生が今後臨地実習を体験していくことになるので、臨地実習で体験頻度の高い陰部洗浄について、その授業方法は今後も様々な内容で評価しうるものと考えます。さらに研究を継続され、教育方法の発展を目指していただけるものと信じております。同じ看護教員として、教育実践への示唆をいただきました。

座長としては、いたらない進行と反省することばかりですが、発表の前に発表者の方と事前の打ち合わせが出来たことで、研究内容を理解しておくことにもつながり、発表者の支援者としての役割は果たせたように思います。

最後になりますが、研究に取り組みされた皆様、お疲れ様でした。今後のご活躍を心よりお祈りしております。また、座長の機会をいただきましたことに感謝いたします。

研究発表座長をつとめて

米 沢 久 子
(金沢医科大学病院)

第21回石川看護研究会学術集会におきまして、第2群の研究発表座長をつとめさせていただきました。担当させていただいた演題3題は、それぞれ

れの専門分野での問題に対して熱心に取り組みされた研究で、看護実践の中でデータの求め方、得られたデータや患者の全体像の捉え方など、活発な

討論となりました。

第1席、金沢医療センターの高橋美和さんの発表では、精神科病棟における精神疾患患者の転倒要因の分析でした。どちらの病院や施設においてもリスクマネジメントに対する関心は高まっております。今回の研究では転倒場面にかかわった看護師にインタビューを行い、転倒要因に関する要因を検討しデータを分類化し、結果19の転倒要因が抽出され4つの項目に分類されました。また、1つの転倒場面にはいくつかの要因が関連しているという結果でした。質疑応答をとおし、患者の行動を安易に予測せず患者が要求を伝えられる手段を講じることの大切さや、個々の看護師が捉える認識の違いを考えさせられた研究でした。

第2席、金沢大学医学部附属病院の定塚佳子さんの発表では、放射線治療における皮膚障害の実態調査をもとに、放射線皮膚障害に関係する因子を明らかにし、予防のための介入方法を検討する目的で行なった研究でした。放射線皮膚障害分類にもとづき皮膚障害の程度を分類し、発生群と非発生群を比較検討した研究でした。臀裂皮膚障害が発生したのは全体の35.7%で、発生群では治療開始より平均38.8日、19.75回放射線量35.6Gyで臀裂皮膚障害が発生し、毎日の皮膚状態の観察が

重要であるとの結果でした。質疑応答ではどのような皮膚の状態を皮膚障害と定義し予防したらよいかなど具体的な論議がなされました。

第3席、国民健康保険志雄病院の高山静子さんの発表では、平成14年から療養病棟入院患者に対し集団音楽療法を取り入れ参加者の言動や表情に変化が見られているため、今回音楽療法に関する関係職員の意識調査を行い、より効果的な音楽療法の継続のあり方を検討する目的で行われた研究でした。石川県立看護大学教授、川島和代先生が講評されたように“利用者が何をしたいと思って行っているのか”に着眼し、ケアの評価が利用者側の意識の変化に繋がっていくということについて深く考えさせられました。

最後になりましたが、研究に取り組みされた皆様には本当にご苦労様でした。今後のご活躍を心よりお祈りしております。

また、不慣れな座長のもと、会場からの質疑応答などや与えられた貴重な時間を充分活用できず反省しておりますが、座長としての機会をあたえていただき、参加できたことは自己を振り返る機会となり、大変感謝致しております。ありがとうございました。